

# インドネシアにおける 美術教育について(1)

福田隆真 佐々木宰\* 小平征雄\*\*

On Arts and Crafts Education in Indonesia

Takamasa FUKUDA Tsukasa SASAKI\* and Yukio KODAIRA\*\*

(Received November 20, 1995)

## はじめに

筆者は、文部省平成7年度国際学術研究（学術調査）「シンガポール、インドネシアにおける美術・工芸教育の調査及びカリキュラム研究」<sup>1)</sup>によって、平成7年8月1日から21日までの3週間にわたりシンガポール共和国、インドネシア共和国の美術・工芸とその教育の現状の調査及び取材を行った。

上記の研究は、シンガポール共和国及びインドネシア共和国の美術・工芸作品について、伝統的側面と現代的側面から調査し、それらを教材化・構造化することによって、経済的発展途上にある東南アジア諸国の美術・工芸教育カリキュラムの基礎的コンセプトを試作することを目的としたものであり、平成7年度、8年度の2か年の研究期間を予定している。

本稿は、平成7年度の調査結果のうち、インドネシア共和国（以降「インドネシア」と記述する）における調査結果を要約し、同国の美術・工芸及びその教育の現状を、下記の目次に沿って報告するものである。

## 目 次

- 1 インドネシアの概要とその教育
- 2 教育行政の中の美術教育・インドネシア教育文化省
- 3 ジャカルタにおける美術の周辺
- 4 ジョグジャカルタにおける美術教育の周辺

---

\* 北海道教育大学教育学部釧路校

\*\* 北海道教育大学教育学部函館校

## 5 ジョグジャカルタにおける美術・工芸

## 6 バリにおける美術・工芸

なお、紙面の制約上、本稿では1から4までを報告し、5以降は機会をあらためて述べるものとする。

# 1 インドネシアの概要とその教育

## (1) インドネシアの概要

インドネシアは、アジア大陸とオーストラリア大陸を繋ぐように、インド洋と太平洋の境界上に点在する13,000以上の島々によって構成された世界最大の群島国家である。赤道直下の雨林気候と、その南北に広がるモンスーン気候、さらに環太平洋火山帯に属する128の火山による土壌は、植物資源、鉱物資源などの豊かな天然資源をもたらし、南海に浮かぶ「エメラルドの首飾り」と例えられている。

位置的には、北緯6度から南緯11度、東経95度から東経141度の範囲に、大小13,667の群島が円弧状に連なっており、総面積は約192万km<sup>2</sup>となっている。これは日本の国土の約5.5倍に相当する。13,667の島々の内、住民が居住しているのは約3,500の島である。その中でも、マレー半島に平行するスマトラ島、その南と東に続くジャワ島、ボルネオ島、スラウェシ島などは大きな面積をもつ。ジャワ島の東には、近年観光地として賑わうバリ島があり、さらにロンボク島、スンバワ島、フロレス島、チモール島などが続き、これらの北にモルッカ諸島などがある。国土の東端は、パプア・ニューギニアと国土を分かちニューギニア島西部である。

インドネシアの人口は、約1億8,000万人と推定されており、その民族構成は、きわめて複雑である。民族集団の数は正確には把握されていないが、300以上ともいわれており、それぞれの言語や生活習慣をもっている。全人口の中でも大きな構成比をしめるジャワ族、スンダ族などの他、マドゥラ族、ミナンカバウ族、プギス族、バリ族、アチェ族などがよく知られている。また、マレー人や、17世紀以降に來住した華人も多い。宗教は、イスラム教信者が、全人口の約90%を占めており、続いてキリスト教、ヒンドゥー教、仏教という順になっている。数の上では、イスラム教は圧倒的な割合を占めており、世界最大のイスラム国家であるといえるが、例えばバリ島ではヒンドゥー教とその文化が根強く残っているように、地域や民族ごとに信仰される宗教の独自性も保たれている。また、イスラムの信仰についても、地域や民族に固有の生活習慣や宗教的な基底と融合する過程において、それぞれの独自性をもつものとなっている。

このようにインドネシアは、その国土の地理的な複雑さと、国民の民族的な複雑さをもつ多民族群島国家であるといえるが、広大な地域と民族を包括する国家としてのインドネシアのまとまりは、「オランダ領東インド」という植民地支配への抵抗のもとに生じたインドネシアの一体感によるものである。オランダによる植民地支配は、17世紀の「東インド会社」の設立を契機として、1800年のオランダ政府の直轄統治から始まるが、太平洋戦争の勃発とともに日本の占領下となった。1945年8月15日の日本の無条件降伏の2日後、1945年8月17日、オランダ領東インドの領土を継承するインドネシア共和国として独立を宣言した。しかし、オランダはこれを認めず再び戦闘状態に陥ったが、国際世論はインドネシアを支持し、1949年8月のハーグ円卓会議に

よって戦争は收拾された。同年12月に連邦共和国として独立をはたし、翌1950年8月に単一のインドネシア共和国となった。

インドネシアは、植民地支配という外圧への抵抗によってなされた統一体であるために、その内部には、地域、生活様式、宗教、言語を異にする複雑な民族の多様性を抱えることになる。したがって、独立以降の統治は、こうした民族の多様性を受容しつつ、一国としての統一を維持することが求められた。この「多様性の中の統一」をよくあらわすものとして、パンチャシラ（国是5原則）と、共通語としてのインドネシア語の採択が挙げられる。

パンチャシラは、1945年8月18日に制定・施行された憲法の前文に述べられている国是である。その内容は、唯一神への信仰、人道主義、インドネシアの統一、民主主義、社会正義の5つである。これらは、多様な民族・宗教に対していわば公約数的に機能し、インドネシア人としてのアイデンティティを維持させるものと考えられる。また、インドネシア語は、マレー語を母胎にした言語であり、憲法においても国語として制定されている。しかし、各民族に固有の言語は、生活の中で依然として使用されているので、インドネシアの人々の言語は、インドネシア統一体としての意識を維持するインドネシア語と、それぞれの民族の地域語の2種である。したがって、インドネシア語は、国語といよりも、アイデンティティ維持のための広域標準語といえることができる。

昨今のインドネシアは、製造業部門に牽引された着実な経済成長を遂げており、国民の生活も向上の傾向にある。しかし、社会の現代化に伴って、都市と地方の格差、外資導入に伴う外国文化の席卷など、誘発される問題や社会構造の中に潜在している問題も数多くある。

## (2) インドネシアの教育

インドネシアの教育は、基本的には教育文化省（Ministry of Education and Culture）を統轄機関として行われている。小学校・中学校・高等学校が、6・3・3制となっているのは日本と同じであるが、義務教育は小学校のみである。この上に、2・3年制のアカデミー（短期大学）や、4・5年制の大学がある。義務教育が小学校までなので、中学校や高等学校は、各種の実業的な学校がある。こうした実業学校の一部や、イスラムの私立学校などは、教育文化省の管轄を受けずに、例えば農業省や宗教省の管轄となっている。

現在の教育にかかわる諸制度は、1950年に制定された「教育法」によるものである。1960年代後半以降は、教育政策が重視され、就学率は上昇している。1988・1989年度の初等教育の就学率は99.6%に達している。しかしながら、1989年度の中学の就学率は55.6%、高等学校は38.5%、大学、アカデミーは9.1%であり、学校数やその施設・設備、保護者の経済的貧困によって、中等・高等教育段階での就学については大きな困難を抱えているといえる。教育に対する社会的な関心の高まりは、段階的な就学率の上昇として捉えることができるだろうが、一方で、学校の吸収力がこれに追いつかない状態は、私立学校の役割を相対的に増加させ、保護者の授業料等の経済的な負担を大きくさせている。また、経済的発展の最中であるとはいえ、各学校の卒業者を労働者として受容するだけの経済的基盤ができておらず、社会問題となっているという。

1994年からは、第6次5カ年開発計画が開始され、今後15年をかけて中学校までの

義務化が計画されているが、上記のような様々な問題に加え、地域的格差や、教育内容そのものの問題も多く、困難が予想される。

## 2 教育行政の中の美術教育・インドネシア教育文化省

### (1) 初等中等教育総局・初等教育局

インドネシアの教育文化省は、各部局ごとに、ジャカルタ市内に分散して置かれている。初等教育局と中等教育局を含む初等中等教育総局は、ジャカルタ中心部から南へ数キロ離れたHang Lekir通りにある。初等教育局と中等教育局は、同じ敷地内ではあるがそれぞれ別の庁舎に置かれている。

初等教育局では、Science Education Quality Improvement Project部の長であるSediono氏と会見することができた。Sediono氏との会見は、インドネシアの教育全体、美術教育の現状、インドネシアのコース・オブ・スタディや教科書などについて説明を求め、回答を得るというものであった。Sediono氏の回答を要約すると、概ね次のようになる。

「インドネシアの教育は基本的に教育文化省が統括している。各教科の内容については、コース・オブ・スタディがあり、これに基づいて教育がなされている。我々が重視している教科は、科学・数学・言語である。科学や数学は、産業や経済の発展上重要な役割をもっている。また、言語とはインドネシア語のことである。インドネシアには多くの民族がおり、それぞれに異なった言葉をもっている。インドネシア語は、国としての統一の上で必要である。

美術に関しての教科書というものはない。ただし、教材を集めた教材集はある。この教材集は、個人ではなく学校に一括して置かれ、生徒も教師もこれを見て授業を行う。<sup>2)</sup>教科書がないことはたしかに問題であると感じている。しかし、教科書を編纂し、発行することはたいへん難しいことだろう。日本が（日本のスタッフ）教科書のコンセプトやその作成について援助してくれることがあれば歓迎する。インドネシアに対する国際的な援助はいろいろあるが、経済的な援助・物質的な援助がほとんどである。文化や教育の面での援助を受けることも大切なことだと考えている。

美術の教科書の中でインドネシアの伝統的な要素と現代的な要素を反映させることは、たやすいこととはいえない。というのも、インドネシアの伝統的な要素というのは、各地の民族によって認識が異なるからだ。それぞれの民族にそれぞれの伝統がある。実際の教育内容は、地域のコンディションに応じてなされている部分がかかなりある。また、教員養成は、地域の教員養成所で行われている。」

Sediono氏は、インドネシアの初等教育のコース・オブ・スタディーを提供してくれた。また、当方からは、日本の図画工作科の教科書を数社分提供した。Sediono氏は、日本の教科書に興味を示していたようで、こうした他国の教科書や教育についての情報がなかなか集まらないことも問題なのだと述べていた。

ここでは、教科書のかわりになっているという教材集をみることはできなかった。また、教科書の作成に関して、その具体的な編纂の難しさはもとより、仮に発行できたとしてもすべての生徒に配布するしないは購入させるという経済上の困難さが大きな問題として存在していることが予想された。

## (2) 初等中等教育総局・中等教育局

中等教育局は、初等教育局に隣接する庁舎にある。ここでは、Ramidjo氏と会見することができた。Ramidjo氏は、美術の教員養成のシステムについて、概ね次のように説明した。

「インドネシアの美術の専門的な教育は、IKIP<sup>3)</sup>（教員養成所）における美術のコース、FKIPという大学の中の教員養成、それからISI<sup>4)</sup>（芸術インスティテュート）の美術コースということになる。IKIP（イキップ）はインドネシア各地にあり、教員養成機関として機能している。ジャカルタ、ジョグジャカルタ、バンドン、スマラン、マラン、スラバヤ、ウチュンバンダン、スマトラなどにある。ISIは、ジャカルタの他、ジョグジャカルタ、バンドン、ソロ、デンパサールなどにもある。

美術教育についての大きな問題は、地域の特性ということにある。インドネシアの各地域には、民族、習慣、生活レベルの違いがあり、例えば教科書などのような統一的な価値を提示することができないからである。地域の特性をどのようにいかすかは、簡単な問題ではない。また、地域によって美術に対する評価が異なっており、全国レベルでの見解と地域の評価は必ずしも一致しない。」

Ramidjo氏の説明は、約1時間にわたって行われ、その間に教育システムの構造を詳細に解説してくれた。

初等教育局のSediono氏も、中等教育局のRamidjo氏も、美術に関する地域的・民族的な違いやその価値観を、教育行政の中で統一的に扱うことの問題点と難しさを強調している。それは、インドネシアが「多様性の中の統一」という国策によって成り立っている事実を、教育の側面から照らし出すものでもあろう。

## (3) 高等教育総局

教育文化省高等教育総局は、ジャカルタ中心街を南北に走るThamrin通りの南に続くJenderal Sudirman通りにある。高等教育局では、Yuhara Sukura教授に面会することができた。Yuhara教授は、教育文化省高等教育総局でドクターコースのプログラムに関する責任者として勤務する一方で、ボゴール農業大学の教授を兼務している。

Yuhara教授は、筆者の研究目的や主旨に理解を示し、インドネシアの高等教育における美術教育を調査する上でいくつかの示唆を与えてくれた。ISI YogyakartaやSTSI Demasarの2つの教育機関の詳細や情報、さらに文化総局取材の必要性などを説いた。

## 3 ジャカルタにおける美術教育と美術の周辺

### (1) 国立博物館(Nasional Museum)

国立博物館は、独立記念塔及びその外周のムルディカ広場の西側Merdeka Barat通りに面して設置されている。インドネシアでは最大級の博物館であり、膨大な数の考古学的・民族学的物品や資料が展示されている。

エントランスのホール、及び中庭の周囲を巡る回廊には、相当数の大小の石仏が展示されている。広大なスペースをもつ1階の各展示室には、ジャワ及びインドネシア各地・各民族の民族工芸品、宗教的物品などが収められている。2階には、金属や宝

石の装身具、宗教用の祭具などの貴金属を中心に展示がなされている。

博物館内の展示は、多種多様な民族の文化遺産を一所に集めたという感が強く、その数も膨大なものであるために、未整理な印象を与える。また、同館のカタログ・図録に関しても出版されていないため、展示物の概観及び詳細については、インドネシアの美術に関する出版物を利用する必要が生じた。<sup>5)</sup>

## (2) 陶磁器博物館(Keramik Museum)

陶磁器博物館は、ジャカルタの北のエリアにあるFatahilah公園の東側に設置されている。ここには、陶磁器の他、絵画や彫刻なども展示されているが、いずれも未整理状態である。

陶磁器については、美術作品として鑑賞の対象となるものは、そのほとんどが中国及びベトナムなどの東南アジアの作品である。インドネシアのものは、国内から出土したいわゆる土器類が大半を占めている。

絵画は、相当数の展示がなされているが、そのほとんどは油彩による現代的な絵画である。個々の絵画についての詳細な解説はなく、作品の羅列に近い展示であった。表現のスタイルは、具象的なものから抽象的なものまであり、様々である。作品のモチーフや色彩について、インドネシアの風土や民族性を直接的に表すものもある。全体としては、技法的にも表現のスタイルについても、インドネシアの絵画としての共通的性格・特徴は、制作者の個人的な表現の展開の中に潜在化しているようである。

彫刻は、それほど多くは展示されていないが、エントランスのホールに抽象的な木彫作品、展示室の数カ所にブロンズによる抽象的な小品が数点展示されている。中庭に、具象彫刻と、現代的な抽象彫刻が展示されているが、展示そのもののコンセプトが不明瞭である。

陶磁器博物館は、陶磁器の他に意図的に現代的な絵画や彫刻を含めた展示がなされており、国立博物館がいわゆる博物館であるのに対し、こちらは美術館的な要素を含めているようである。しかし、前述のように、展示のコンセプトや方法にかなりの未整理さを残すために、インドネシアの造形文化を把握することは難しい。

## (3) ジャカルタ芸術大学(Institut Kesenian Jakarta)

ジャカルタ芸術大学は、Cikini Raya通りにあるTaman Ismail Marzuki内にある芸術の専門教育機関であり、Taman Ismail Marzuki(TIM)、ジャカルタアカデミー(AJ)、ジャカルタ・アート・カウンシル(DKJ)とともにジャカルタ・アート・センター(PKJ)を構成している。

Taman Ismail Marzuki(TIM)は、シアターやホールを持つ文化センター的な公園で、伝統芸能やコンサートが催され、総合的な芸術を専門的に学ぶための環境は整備されている。

ジャカルタ芸術大学は、1970年に、ジャカルタアカデミーの芸術部門として創設され、1976年にスハルト大統領によってTaman Ismail Marzukiの敷地の北側にキャンパスを開くことができた。1.8ヘクタールのキャンパスには、学長の棟をはじめ、各学部の棟、スタジオ、シアター、展覧会用ホール、図書館、工房などの多くの設備がある。

学部は、Film and Television、Performing Arts、Fine Artsの3つがある。

Film and Television学部には、Film、Television、Filmology、Photography、Audioの学科があり、Performing Arts学部には、Music、Dance、Theatre、The Performing Arts Studiesの学科が、Fine Arts学部には、Fine Arts、Design、Craftsの学科がある。

このうち、Fine Arts学部の教育内容を概観すると、Fine Arts学科では、絵画、彫刻、プリントメイキングのプログラムが用意されており、Design学科では、グラフィックデザイン、インテリアデザイン、ファッションデザインのプログラム、Craft学科では、テキスタイル、陶芸、木工、金属とジュエリーのプログラムが用意されている。それぞれのプログラムは、芸術の専門教育であるので、芸術の教員養成としての性格は意識されていない。また、卒業生が教職に就くこともないという。

筆者は、学長のToeti Heraty教授と、Wagiono Sunarto教授に会見することができた。Toeti Heraty教授は、上記のようなジャカルタ芸術大学についての概要を説明してくれた。また、Wagiono Sunarto教授の案内によって、絵画、テキスタイル、陶芸、木工などの工房や教室の施設、及び学生の作品、制作風景を見学することができた。絵画では、油彩又はアクリリックの具象表現が多く、現代的な表現である。木工は、工芸というよりは立体造形としての表現を追求する傾向が強いようである。陶芸は、技術習得を重視した制作の傾向が強いようである。

ジャカルタ芸術大学のFine Arts学部におけるプログラムや学生作品は、概して欧米の美術観、芸術観を基本としているように思われる。それは、欧米の造形芸術の思考が、インドネシアの現代化とともに急速に根付きつつあることを意味している。今後は、このような現代的な芸術表現が一般化される一方で、インドネシアの伝統的な芸術文化のアイデンティティが問われる状況になることが予想される。

#### 4 ジョグジャカルタにおける美術教育の周辺

##### (1) サルジャナヴィヤタワ・タマンシスワ大学

ジョグジャカルタは、近代都市ジャカルタとは対照的に、古都の趣を感じさせる落ちついた都市である。また、ここには、インドネシア屈指の優秀な大学であるガジャ・マダ大学があり、学園都市ということもできるだろう。

サルジャナヴィヤタワ・タマンシスワ大学(Sarjanawiyatawa Tamansiswa University)は、教育、経済、農業の3つのスクールを持つ私立大学である。インドネシアの教育の父と呼ばれたKi Hajar Dewantaraが1955年に創設したサルジャナヴィヤタワ基金によって運営されている。

教育のスクールには、数学・物理、言語・芸術、テクノロジーの3つの学科がある。このうち、言語・芸術の学科では、インドネシア語（国語）、英語、美術・手工芸(Art and Handicraft)の3つのプログラムがある。美術・手工芸の学科では、絵画、彫刻、手工芸の確かな技能をもち、高等学校において指導することができる人材育成を目標としており、卒業生は、アーティストや教員として働いている。設備は、図書館、コンピュータ・センター、実験室、アートスタジオ、様々な工房などがある。

筆者は、学長のSubronto Prodjoharjono教授に、サルジャナヴィヤタワ・タマンシスワ大学の教育についての説明を受けるとともに、教育のスクールを見学した。美術・手工芸の学科の学生による手工芸作品の展示を見ることができたが、作品は、

パティック、ワヤン人形、木工作品、民族舞踊のマスク、民族楽器などのインドネシアの伝統的な手工芸作品が中心であった。伝統的な工芸のスタイルと、技術を習得させようとする教育プログラムであることがわかる。

芸術家養成を目的とした前述のジャカルタ芸術大学の作品傾向が欧米の造形的思考を基盤にした現代的なものであるのに比べて、教員養成を目的とするサルジャナヴィヤタワ・タマンシスワ大学の伝統的な作品傾向は、極めて対照的である。高等学校教員としての資質形成のために、こうした伝統的な造形文化の技術習得のプログラムがなされていることは、高等学校における美術教育の内容にも、インドネシアの伝統的美術・工芸が強く反映されていることを意味しているといえよう。

## (2) インドネシア芸術大学(Institut Seni Indonesia Yogyakarta)

Institut Seni Indonesiaは、通称ISI（イシ）と呼ばれ、国立の芸術の専門的教育機関である。ISIには、Fine Art、Performing Art、Multi Mediaの3つの学部があり、それぞれジョグジャカルタ市内に分散して設置されている。

このうちFine Art学部には、絵画、彫刻、アートグラフィックの専攻を含むFine Art学科、インテリアデザイン、ヴィジュアルコミュニケーションの専攻を含むDesign学科、さらに木工、金工、陶芸、テキスタイル、皮工芸の専攻を含むCraft学科がある。

筆者は、Fine Art学部長のSun Ardi氏に、ISIの概略の説明を受けるとともに、学内の施設、また学生作品の展覧会などを見学することができた。学内に展示されているインテリアデザイン、環境デザインの作品や、版画作品などを見ると、表現方法や内容が他の大学の作品に比べて、視覚的に整った表現のスタイルを持っている。個々の技術もインドネシアの中では高いレベルに達しているように思われる。

展覧会用のホールでは、学生の作品展が行われており、油彩画や彫刻作品が展示されていた。彫刻作品は、多様な素材を組み合わせた抽象的な作品が主であるが、油彩画は、抽象作品、具象作品が半数ずつ展示されていた。絵画のモチーフや色彩感覚にインドネシア的な要素を感じることができた。いずれの作品も、一定の技術的なレベルを維持した上での、抑制のきいた表現となっている。

ISIには、教員養成のためのプログラムは編成されていない。学部長のSun Ardi氏も、それはIKIPの仕事であると述べており、それぞれの教育機関が明確な教育目的の上に機能していることをうかがわせる。

## (3) 芸術教科教員研修センター(Pusat Pengembangan Penataran Guru, Kesenian)

教員研修センターは、通称PPPG（ペーパーペーパー）と呼ばれ、学校教員の再教育、研修のための教育機関として機能している。筆者は、芸術教科に関するPPPG Kesenianを訪問し、職員のKuntari Erimurti氏にPPPG Kesenianの概要の説明を受けるとともに、施設の見学をすることができた。

PPPG Kesenianは、教育文化省に所属する研修機関であり、1992年に設立されている。主として高等学校の教員を対象にしており、インドネシア国内唯一の芸術系のPPPGである。スタッフは350人おり、研修生は年間1000から1500人に達するという。研修期間は3年制であるが、3カ月程度の短期の研修生もいる。インドネシア国内には、64の美術、工芸、職業系の高等学校があり、こうした学校に勤務する教員の資質



を高めることを目的としている。

研修プログラムは、現代音楽、伝統的音楽とオーケストラ、伝統的手工芸と産業デザイン、美術(Fine Art)の4つのストリームに分かれている。美術や工芸に関する教育内容は、伝統的な美術・工芸とともに、現代的な要素を取り入れている。こうした傾向は、社会全体の現代化に伴う高等学校における教育内容の変化を示唆しているといえるだろう。

教授方法に関しては、独自に編纂したモジュールと呼ばれる教材・技法集を使用して、これに即した教授がなされている。現在、学校教育の美術・工芸では、教科書がなく、このモジュールによって教育が行われている。モジュールは、教材や教育内容のテーマごとに分冊されており、個々の教材・教育内容が全体のプログラムの中でどのように位置づけられているかを明示しているので、一つひとつのステップを確実に習得していくためには、有効な手段であると思われる。その内容についても、技術的内容や発想の方法論が豊富な図版とともに詳解されており、基礎的な技術習得に重点が置かれているように思われる。現在、モジュールは、16000あり、125の技法があるという。Kuntari Erimurti氏は、数冊のモジュールを提供してくれた。

PPPG Kesenianは、広大な敷地に充実した設備を持っている。木工、金工、陶芸、パティックなどの工房は、十分な広さがあり、道具や機械などの設備も現段階での最新のものが導入されている。施設内に展示されている作品は、インドネシアの伝統的な工芸作品が主であり、技術的にも高いレベルに達していると思われる。また、研修生の態度もたいへん熱心で、これまで見学した芸術大学の学生とは異なった制作態度が感じられた。

PPPG Kesenianの教育プログラムは、産業・職業教育を強く意識したものであるといえる。それは、必然的に高等学校における美術・工芸の教育にも反映していることになる。Kuntari Erimurti氏は、学校教育における美術・工芸教育の目的について、職業的な能力を高めることにあると明言している。

#### (4) 国立美術高等学校(Sekolah Menengah Seni Rupa Yogyakarta)

Sekolah Menengah Seni Rupaは、SMSRと呼ばれる国立の芸術教育のための高等学校である。SMSRは、ジョグジャカルタの他にも、パダン、パレンバン、バンドン、スラカルタ、スラバヤ、デンパサールなどの都市にある。芸術系の高等学校は、美術工芸、音楽、舞踊の3種類があり、SMSRは美術工芸の高校学校として機能している。ジョグジャカルタのSMSRの生徒数は、約700人であり、69人の教員が指導にあっている。

学科は、美術(Fine Art)、木工、陶芸の3つに分かれている。比較的広い敷地に、数多くの実習室が設置されており、それぞれの設備も整っている。教育内容は、伝統的な美術・工芸と、現代的なものの両方を扱っているという。

展示されている生徒作品や、教室の制作途中の作品を見ると、絵画や彫刻は、自己表現というよりはむしろ肖像画、肖像彫刻のための表現として扱われている印象を受ける。特に彫刻については、政治的な偉人などの肖像画を参考に肖像彫刻の制作をしているようであり、心象表現としての彫刻作品は見ることができなかった。ヴィジュアルデザインに関する作品も多く、イラストレーションやポスター、カートゥーンなどの緻密な作品が見られた。木工、陶芸に関しては、基礎的な技術の習得を目的とし

た教育内容が組織されているようである。これらは、インドネシアの伝統的な工芸を規範としているようである。木工の授業では、マホガニー材を用いた浮き彫りでネームプレートの制作を行っていたが、使用している刃物や、彫りの技法などはインドネシア独特のものであった。

校内には、作品展示のホールがあり、生徒作品が数多く展示されていた。木工作品、陶芸作品、ポスター、イラストレーション、油彩画などを中心とした展示で、いずれの作品も真剣な制作態度がうかがえるものである。また、授業に臨む生徒の態度も極めて真剣である。

生徒の中には、卒業後に芸術系の大学へ進学を希望する者も多いという。これまで見てきたジャカルタ芸術大学や、インドネシア芸術大学などの教育プログラムや学生作品の性格は、職業教育を基盤とする高等学校の美術教育のそれとは異なっている。したがって、SMSRの教育からは、自己表現としての美術・工芸教育と、職業教育として教育の折衷的な性格が感じられる。両者の分岐点的な存在としての学校であるように思われる。

(5) 国立工業工芸高等学校(Sekolah Menengah Industri Kerajinan Yogyakarta)

Sekolah Menengah Industri Kerajinanは、SMIKと略称される工業工芸学校である。SMIKは、SMSRに比べるとはるかに設置数が多く、全国各地にある。ジョグジャカルタのSMIKは、現在、生徒数約1400人（1学級36人で、40学級）、教員109人で、職業教育としての工業・工芸教育が行われている。

学科は、木工、金工、皮工芸、テキスタイル（主としてバティック）、陶芸の5つに分かれている。SMIKの教育は、それぞれの学科における技術を習得することにより、インドネシアの伝統的な工芸を担う人材育成、あるいは手工業的な産業領域の職能を持つ人材育成を目的としている。したがって、教育内容は、工芸品の具体的な制作方法の学習が中心となっている。

木工については、伝統的な手工芸の学習、家具製作の工程の学習などがなされている。金工は、インドネシア特有の銀細工などを教材としている。皮工芸では、皮靴の制作、陶芸では石膏型による制作の学習がなされていた。また、インドネシアの重要な伝統工芸であるバティックの学習もなされていた。それぞれの学科における学習は、生徒個人の自己表現を目的として行われてはならず、一定の規格や様式を忠実に守り、制作する技能を段階的に高めていくことが重視されているようである。

伝統的な工芸制作の技術習得が重視されているのは、例えば社会の現代化によって失われつつある伝統的文化の継承や保護というような理由によるものではないと思われる。木彫や金細工、皮工芸、バティックなどは、いわばインドネシアの現役の造形文化であると同時に、産業として位置づけられていると考えられる。このような手工業、手工芸が、インドネシアの経済全体の中でどれほどの比重を占めるものかは不明であるが、地方都市や経済発展の遅滞する地域においては、重要な産業として認識されていることが予想される。

なお、SMIKの校内の一角には、アート・ショップと名付けられた売店が置かれており、授業の中で作られた生徒作品を展示・販売している。銀細工、バティック、木製家具類など、インドネシアの一般の土産物店と同じような商品の構成である。

(未完)

## 注

- 1) 研究代表者：福田隆真（山口大学教育学部助教授）、研究分担者：小平征雄（北海道教育大学教育学部函館校教授）、佐々木幸（北海道教育大学教育学部釧路校講師）
- 2) この教材集は、モジュールと呼ばれている。筆者は、後にジョグジャカルタのPPPG（教員研修センター）でこのモジュールの一部を入手するが、その内容は、単なる教材集というよりも教科書と技法書を合わせた指導及び学習のためのマニュアルといった趣である。
- 3) IKIP:Institut Keguruan（教員） dan（and） Ilmu（科学） Pendidikan（教育）。IKIPは、ジャカルタ、バンドン、スマラン、ジョグジャカルタ、スラバヤ、マラン、メダン、パダン、マナド、ウチュンパンダンにある。
- 4) ISI:Institut Seni Indonesia
- 5) インドネシアの美術工芸に関する比較的入手しやすい文献としては、次のようなものがある。
  - ・ Anne Richter, ARTS AND CRAFTS OF INDONESIA , Thames and Hudson , 1993.
  - ・ Haryati Soebadio , ARTS OF INDONESIA , Archipelago Press in association with the National Meseum of the Republic of Indonesia .

## 参考文献

- ・ ジャカルタ・ジャパン・クラブ、「インドネシア・ハンドブック 1994年版」、ジャカルタ・ジャパン・クラブ、1994年
- ・ 石井米雄、高谷好一、前田成文、土屋健治、池端雪浦監修、「東南アジアを知る事典」、平凡社、1986年
- ・ インドネシア共和国教育文化省原著、森弘之、鈴木恒之訳、「世界の教科書＝歴史015インドネシア」、ほるぷ出版、1982年
- ・ 小川忠、「インドネシア 多民族国家の模索」、岩波書店（岩波新書）、1993年
- ・ 永積昭、「インドネシア民族意識の形成」、東京大学出版会、1980年
- ・ 大隅紀和、「インドネシアの教育事情——教育文化省機構と教育大学IKIPを中心に——」、鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）第7巻、1992年
- ・ 大隅紀和、「途上国における広域遠隔地教育システムの事例——インドネシア国立オープン・ユニバーシティ(UT)の現状と課題——」、鳴門教育大学学校教育研究センター紀要6、1992年
- ・ 西村重夫、「インドネシアにおける国民教育制度改革の構図」、九州大学教育学部比較教育研究施設紀要42、1991年
- ・ 杉山明男、「東南アジア諸国の学校教育に関する比較研究その3」、国際教育研究所紀要1、1992年
- ・ 岩永雅也、「多文化国家インドネシアの教育システムと公開大学」、放送大学研究年報9、1992年
- ・ 牟田博光、前迫孝憲、「インドネシアからの留学生とわが国の留学生政策に関する研究」、東京工業大学人文論叢16、1991年

- Institut Kesenian Jakarta, "Institut Kesenian Jakarta", IKJ, 1994, Jakarta. (Institut Kesenian Jakarta大学案内)
- Institut Seni Indonesia Yogyakarta, "KATALOG Institut Seni Indonesia Yogyakarta 1994-1995", ISI Yogyakarta, 1994, Yogyakarta.
- Dra. Suwati Kartiwa M.Sc, "Tenun Ikat • Indonesian Ikats", Penerbit Djambatan, 1987, Jakarta.
- Joseph Fischer, "Modern Indonesian Art, Three Generations of Tradition and Change 1945-1990", Panitia Pameran KIAS(1990-91) and Festival of Indonesia, 1990, Jakarta and New York.

## 付記

本稿の執筆については、第1章を小平が、第2章を福田が、第3章及び4章を佐々木が担当し、全体を福田がまとめた。

また、本研究の調査及び取材にあたって、次の方々の多大な協力をいただいた。ここに感謝の意を表します。

- 株式会社スカイラインビルディング 鈴木章司氏、Mr. Hendra Handjaja
- The Japan Foundation Jakarta Mr. Inami Kazumi
- Drh. P. Sudarminto MS.

番号	学校の種類と名称	日本語名称	制度
	<b>一般学校</b>		
1	SD=Seko Dasar	小学校	6年
2	SMP=Sekolah Menengah Pertama	普通中学校	3年
3	SMA=Sekolah Menengah Atas	普通高校	3年
4	Akademi=アカデミー Universitas	短大・専門学校 大学	
	<b>職業系中学校</b>		
5	ST=Seko Teknik	技術中学校	3年
6	SKKP=Sekolah Kesejahteraan Pertama	家政科中学校	3年
	<b>職業系高等学校</b>		
7	SMKI=Sekolah Menengah Karawitan Indonesia	伝統芸能科高校	3年
8	SMIK=Sekolah Menengah Industri Kerajinan	手工芸科高校	3年
9	SMSR=Sekolah Menengah Seni Rupa	美術科高校	3年
10	SMM=Sekolah Menengah Musik	音楽科高校	3年
11	SMKK=Sekolah Menengah Kesejahteraan Keluarga	家政科高校	3年
12	SMTK=Sekolah Menengah Teknologi Kerumahtenggaan	家政技術科高校	3年
13	SMPS=Sekolah Menengah Pekaejaan Sosial	社会奉仕科高校	4年
14	SMEA=Sekolah Menengah Ekonomi Atas	商業科高校	3年
15	STM=Sekolah Teknik Menengah	技術科高校	3年
16	SMT= (Sekolah Menengah Teknik) Pembangunan	技術科高校	4年
17	SMT= (Sekolah Menengah Teknik) Grafika	グラフィック科高校	3年
18	SMT= (Sekolah Menengah Teknik) Penerbangan	航空機科高校	3年
19	SMT= (Sekolah Menengah Teknik) Perkapalan	造船科高校	3年
20	SMT= (Sekolah Menengah Teknik) Pertanian	農業科高校	3年
	<b>教員養成系</b>		
21	IKIP=Institut Keguruan dan Ilmu Pendidikan	教員養成大学	

### インドネシアの学校の種類と名称

拠出：ジャカルタ・ジャパンクラブ編集「インドネシア・ハンドブック 1994年版」  
ジャカルタ・ジャパン・クラブ、1994年、p40



図1 インドネシア教育文化省初等中等教育総局

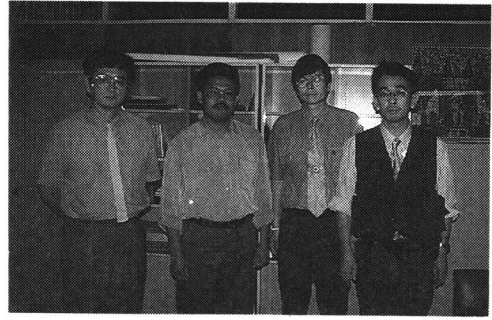


図2 教育文化省初等教育局、Sediono氏と筆者



図3 教育文化省中等教育局、Ramidjoと筆者

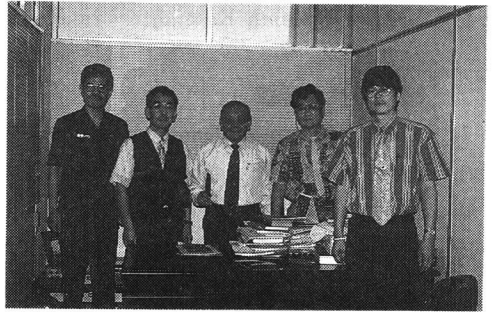


図4 教育文化省高等教育局、Yuhara氏と筆者

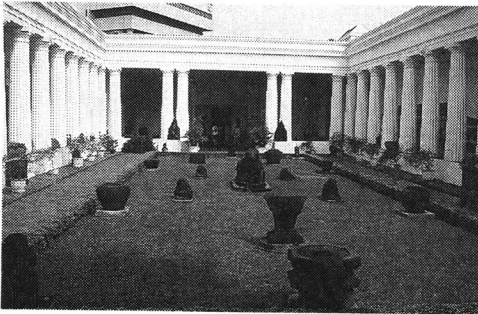


図5 国立博物館

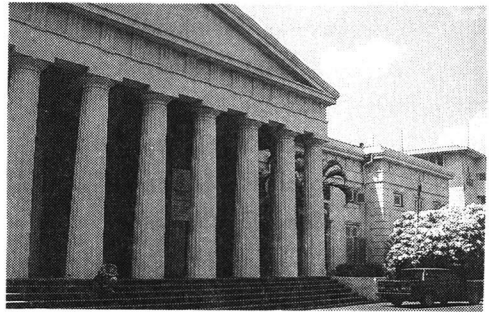


図6 陶磁器博物館

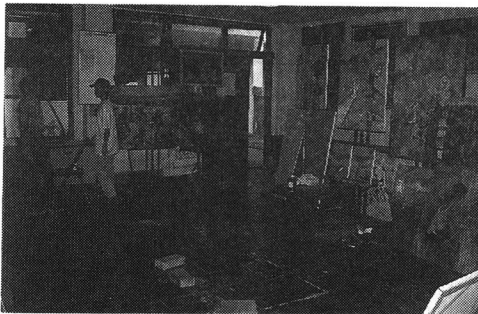


図7 ジャカルタ芸術大学油彩画教室



図8 サルジャナヴィヤタワ・タマンシワ大学、学生作品の展示



図9 サルジャナヴィヤタワ・タマンシスワ大学、  
学生作品の展示

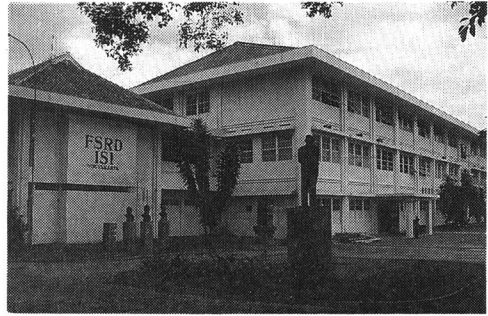


図10 インドネシア芸術大学 (ISI) 校舎



図11 ISI展覧会場

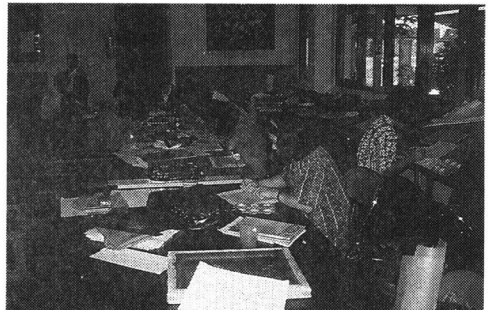


図12 PPPG、テキスタイルの授業風景



図13 PPPG、金工の授業風景



図14 SMSR、生徒作品 (彫刻)

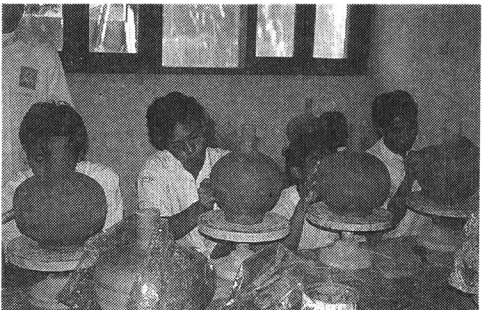


図15 SMSR、陶芸の授業風景



図16 SMIK、パティックの授業風景